

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 5 月 15 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370742

研究課題名(和文) ミクシの理念を礎とした小学校英語ウェブ内在型ブレンディッドラーニング体系の構築

研究課題名(英文) On the Construction of "Why"-oriented Blended Learning System for English at Elementary School

研究代表者

浅間 正通 (ASAMA, MASAMICHI)

東洋大学・ライフデザイン学部・教授

研究者番号：60262797

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、小学校における英語教育の将来的な教科化へのシフトを見据え、そこに派生するであろう様々な問題点を洗い出すとともに、英語教育を専門としない小学校教員の科目担当に関わる負担軽減を促す意図からブレンディッドラーニング(BL)用教材の体系構築を推進した。ただし、単なるBL教材としての体系構築ではなく、生徒たちの「英語」という異質な言語への「気づき」を促したい意図から、フィンランドの教育、とりわけ初等教育で重視されているMIKSI(なぜ)の理念を拠り所として、教材開発を行いながら体系構築を行った。

研究成果の概要(英文)：In this research, we constructed a WHY-oriented blended learning system for English at elementary schools after close examination of anticipated problems for when it will be introduced as a required subject there in the near future. The major purpose for this lies in two aspects: to assist teachers who are not majoring in English teaching, and to let learners develop WHY-oriented thinking skills which has always been a system respected in Finnish education. Also, this research focused on the learners' awareness toward English, affected by the different cultural background in Japan.

研究分野：英語教育学

キーワード：ミクシ ブレンディッドラーニング eラーニング デジタル学習 アナログ学習 協調学習 自律学習  
ウェブ教材

### 1. 研究開始当初の背景

2011年4月より小学校5・6年生を対象に必修化導入された小学校外国語活動(いわゆる英語活動)にあっては、当初の戸惑いの声を他所に、『英語ノート』の後継『Hi, friends!』の充実およびスマートボードといった教育機器との親和性、さらには指導マニュアルの充実などを背景に、その後現場で円滑に進展している様子が窺えた。しかしその一方で、現場教師たちによる指導マニュアルへの過度依存が様々な調査で露呈するとともに、多くが専門外の領域(語学)を担当することを余儀なくされていたことから、教師自身の英語教育観の不在も顕在化することとなった。「校務の多忙さ」も手伝って、単元別指導項目のノルマ消化が優先される風潮は、ある意味で子どもたちの英語という外国語への「気づき」を促す視点欠落が生じ、早期英語教育導入の意義をも揺るがしかねない状況であると言えた。さらに、2001年5月22日開催の政府による教育再生実行会議では、将来の我が国の国際競争力を支える人材育成の一環から小学校英語の低学年必修化(2020年より3年生から必修化)も提言されており、実用性を踏まえた小学校英語の基本理念および展開方法の確立は危急の課題と言えた。

そのような状況のもと、2000年に始まったOECD(経済協力開発機構)加盟国を対象に3年に1度実施されるPISA(国際学習到達度調査)において分野別リテラシーもしくは総合リテラシーで頻りに首位を射止め、その秀でた教育力の高さで国際的注目を集めているフィンランドの教育の根幹を担う「ミクシ」(MIKSI=「なぜ?」)なる教育方針に研究上の示唆を見出した。さらに、幾度かの当該国初等中等教育現場への視察を通して、語学教育も含めて多様な教科の中で、結果そのものよりも結果に至るプロセスに教育と学びの眼差しを注ごうとするこの方針が目を引いた。そして、彼の国の子どもたちの思考力・論理力が秀でる背景に、このMIKSIが学びの質を担保しているとの強い確信を得た次第である。

そこで、小学校英語担当教師の負担軽減を視野に入れ、同時にミクシの考え方を基軸とした小学校英語の学びにおける「気づき」を促進する「アプローチ(理論) メソッド(方法) テクニク(技術)」を、中学校英語への橋渡しも俯瞰しながら、ブレンディッドラーニングとして体系構築を試みたいと考えたのが本研究開始当初の背景となった。

### 2. 研究の目的

前述したように、「小学校英語」における足場は未だ不安定な状況にあるといつてよい。小学校英語が5・6年生を対象に教科化そしてまた必修化の低学年移行が待ち構える中、そのアイデンティティ確立は急務と言える。かといって、現場教師たちの物理的・心的負担のみが増す展開となつては、決して

その意義は見いだせない。そこで、小学校英語の負うべき役割と、そしてまた現場への負担軽減を意図して構築しようとするのが、「ミクシの理念を礎としたブレンディッドラーニング体系の構築」である。

ブレンディッドラーニング(以下、BL)とは、集合学習とeラーニングを組み合わせた学習形態を指し、非同期型の個別学習と同期型の集合学習のそれぞれの短所を相補する学習方法である。いわゆる、教師の一斉指導、グループ学習、WBT(Web-Based Teaching)を活用した個別学習、テレビ会議による遠隔地学習者との協同学習などを効果的に組み合わせながら、学習者の理解度を高める手法である。教師による学習支援が得られるメリットに加え、学習意欲の継続も図られ、ひいては自律学習支援にも寄与することから、昨今その人気が根強い。また展開次第では教師の指導負担の軽減にも資し、様々な教育段階で導入されたりしている。しかし、今日のBLとは、対面授業の補完としてeラーニングが組み込まれる形態が多いため、時に相互が独立した学習形態と解され、いわゆる学習者に対する「躓きへの配慮」が欠落しがちな傾向にあるのは否めない。

そこで、本研究ではeラーニングそのものの中に対面授業の特質を組み込んだ「ウェブ内在型のBLシステム」を検討し、オーセンティックな授業支援e教材として体系化を図ることを狙いとした。たとえば、教師が児童に学ばせたい語彙や目標文など、特定の学修項目にあっては、フィンランドの「ミクシ」の教育理念を参考に、「誤答から正答へのプロセス」を重視した展開を果たすシステムの構築を目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究では、大きく2つの点に軸を据えて研究着手することとした。

まず1点目は、小学校英語活動における「気づき」を促す教育理念の確立である。「鉄は熱いうちに打て」に象徴される早期英語教育導入派と、「安易に英語嫌いになる子たちを量産してしまう」に象徴される早期英語教育導入否定派との間では、絶えず概念的意見対立に終始しながら今日に至ってきた変遷がある。それゆえ、小学校学習指導要領における配慮事項では、いわゆる妥協点としての理念を共通コード化した記載内容に留められている。小学校英語教育現場で問題意識の先鋭化が希薄化している背景のひとつでもある。したがって、本研究では「学びから気づきへ」という新たな英語教育理念の確立を目指すこととした。

もう1点目は、前述の確立理念に基づく思考連鎖型の具体的学習システムの構築である。モバイル端末が普及したことで、ディスプレイの狭小化が進み、子どもから大人まで下を向いては小さな画面に見入り、絶えずスクロール作業に追われている。すなわち、一

覧性を特質とした紙媒体学習で培われていた「思考の連鎖」が途絶えがちとなっているのである。この傾向は学び場面（たとえば学習時の電子辞書活用など）でも散見され、いわゆる、答えに至るための多角的アプローチに歪が生じ始めているようである。そこで、小学校段階で必要な認知教育と情意教育を機能統合させた合流英語教育の手法を導入したウェブ教材の試作開発を行った。

上記2点の研究内容を達成するために、本研究期間の3年間を基礎研究年度(2014年度)、実験分析研究年度(2015年度)、応用開発研究年度(2016年度)と位置づけ、さらに次の研究ステージに対応させて研究進捗させることとした。

#### 研究ステージ[1]

小学校英語 BL 導入に係る実態調査(諸外国との対質も踏まえて)

#### 研究ステージ[2]

現状における問題点の洗い出しおよび思考連鎖型 BL モデルの理論化

#### 研究ステージ[3]

ウェブ内在型 BL モデルの構築

### 4. 研究成果

#### (1) 【BL 導入の意義】

BL は、今や現代の教育の手法を論じようとするとき、もはや欠かせないものとなっている。BL が普及し始めた背景には、eラーニングによる効率性と経済性が深く関わっているのは言うまでもない。1990年代から様々な教育分野で導入されるようになったeラーニングであるが、21世紀に入ると種々の難点が露呈し始めた。例えば、生徒1人1人が孤立しがちとなり、その結果、途中で挫折する者が生じ始めたり、コンピュータと向き合っているだけでは学習意欲が湧かず内発的動機づけに希薄化が生じたり、コミュニケーションのためのデバイスが実装されてはいるものの、それらを必然として主体的に活用するシステムがなされていない、などである。そこで対面学習およびeラーニングの長所と短所を補うべく生まれた教育手法が BL である。その基本理念は「学習形態をブレンドする」こと、すなわち異なる学習メディアを融合および協調させることにある。eラーニングのみに頼った授業では、自分のペースで学べる利点がある一方で、学習者1人1人の自律性に委ねられた学習が求められるので、学習者の孤立化が進むことも稀ではない。しかし、そこに対面授業と組み合わせれば、教師や友人同士の関わり合いも手伝って、大きな効果が期待できる。対面式授業をブレンドすることで「決まった時間に決まった場所で学習する」という規則性が生じ、またそこで学生同士のコミュニケーションによる刺激が発生し、結果として学習意欲が高まる効果が期待できる。そこで BL

を小学校英語に導入するための視点を検討した。

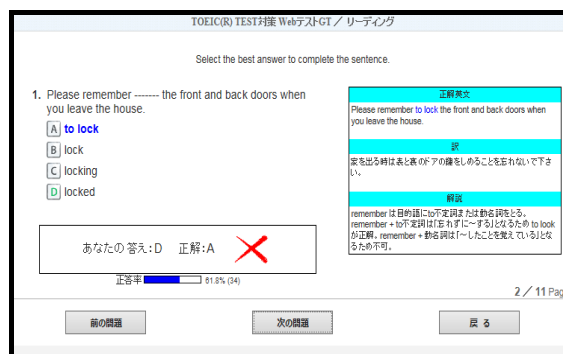
#### (2) TOEIC 指導教材での試作

TOEIC 自体は小学校英語とは直接連動しないが、効果的な BL の在り方を考える上で、筆者が実験しやすい職場環境は大学であったので、大学の英語教育の進展と同時に小学校英語の推進を狙いとして、TOEIC 媒介の BL 教材を試作した。そして、試作のポイントとしては、前提として紙媒体教材としてのテキストおよび同一内容のeラーニング教材を開発することとした。開発にあっては、(株)ニュートンプレスとの共同開発とした(2015年3月)。

図1: 印刷媒体 & eラーニング教材ポータル



図2: eラーニング誤答背景の解説場面



そして半年間(2015年9月から2016年2月)の実験利用(BL授業媒体)を経た結果、被験者(BL学習者)から高い評価が得られたので小学校英語への応用を検討することとした。

#### (3) 小学校英語 BL 教材開発の視点

研究開発期(1992-2001) 英語活動期(総合的な学習の時間/特別活動; 2002-2010)、外国語活動実施期(「領域」として必修化; 2011~至現在)と、これまで大きく3つの時期に区分可能な小学校英語であるが、2013年12月に文部科学省が発表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」の意向を

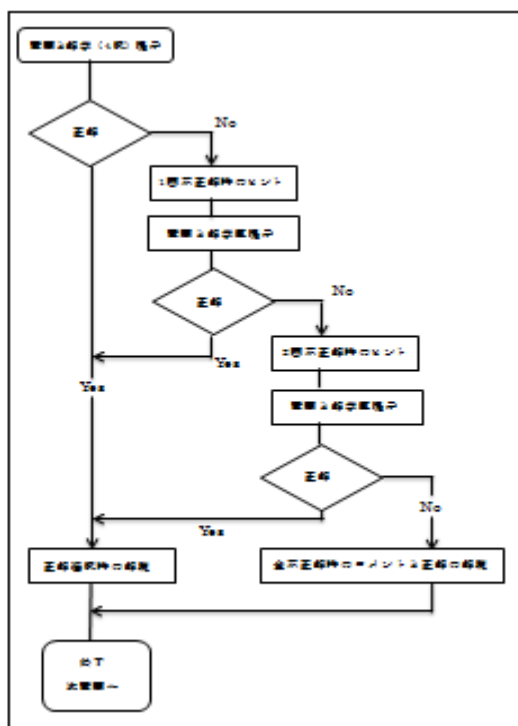
受け、現行の小学校 5・6 年生対象の外国語活動（現在必修化）が 2020 年度を目途によいよ教科化への新たな局面を迎えることとなった。これにより、4 技能（リーディング、リスニング、ライティング、スピーキング）の指導がより柔軟にできることとなるが、本研究従事期間にあっては、あくまでも外国語活動の一環としての小学校英語であったがゆえに指導内容および指導方法においてもタブー視される領域も多々あり、その研究内容の進展に制限が加わることも少なからずあった。そこで、本研究においては語彙指導に特化して研究実践を行った。そして、留意した点は、下記の 2 点であった。

まず最初に、既述した BL の理念に照応した、「デジタル」と「アナログ」の協調学習。とりわけ、後者「アナログ」部分においてもっとも重視したのがフィンランド・メソッドとしての「ミクシ」の応用である。答えそのものよりも答えに至るプロセスを大切にすフィンランドのミクシを多用する教育手法こそ今後の我が国の早期英語教育に求められるコアチップスであると解釈した次第である。

そして 2 つ目の点としては、英語を専門として学んできてはいない現場教師の負担軽減となるよう、 の理念を反映させた「ウェブ内型ブレンディッドラーニング教材」の開発である。

そして、 を推進する手立てとしての学びのフローに関しては下記のようなフローチャートを策定することとした。

図 3：eラーニング部のフローチャート



この一連の研究上の視点を礎として開発を行った小学校低学年用語彙指導 BL 教材の一例を下記に紹介しておきたい。

【語彙学習 BL 教材：サンプル】

[2 回誤答した場合の作業の流れ]

1. イラストを見ながら「きょう、パパがママに仕事からの帰りにお花を買ってきてママにわたしました。今のママの気持ちを表す英語 A から D を聞いてあてはまる記号をえらびましょう！」と画面上で作業の指示表示。
2. そして A(angry) B(sad) C(happy) D(sleepy)を聞いて回答 A を選択。
3. 誤りと判定されたので D を選択。解説をみたのち、再度解答選択として C をクリック。
4. 正解判定となったところで残る B の解説。
5. 正解の happy がつく表現として「ハッピーバースデー」とカタカナ入力して解答送信。
6. Happy Birthday!以外の表現を調べ学習。オーラルリサーチプロジェクトの一環から家族や他の大人に尋ねて解答を得る。



上記 BL の特徴としては、安易なクリックであっても身近な表現から正解を知るプロセスを経る点、さらには実際に誰かに face-to-face で質問しながら派生表現を学ぶ点である。デジタル学習と「ミクシ」を柱としたアナログ学習が相補的な機能として働いている点である。

上記に示したサンプル以外にも豊富に語彙指導用の BL 教材を作成してきたが、前述したように、外国語活動ならではの制約があるため、踏み込んだ開発にまで進むことができなかったのが残念である。

幸い、2020年度からの教科化を見据えて、本研究の更なる延長上の研究として申請していた科研費が採択されたので課題の部分は次なる研究に委ねてゆくつもりである。四技能連携を視野に入れたBL教材を集大成してゆく予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計 3 件)

浅間正道、問われるのはデジタルとアナログを鷹揚に協調させるコラボ力、社団法人日本経営協会、査読無、OMNI-MANAGEMENT No.6、2016、pp.6-9

田村敏広、補助動詞「(て)しまう」と感嘆詞「しまった」の意味分析と拡張メカニズムの考察、認知言語学論考 12 (vol)、2015、pp.337-378

浅間正道・本多まりえ、TOEIC スコアアップを企図したスマートフォン媒介の自律英語学習に関する一考察、異文化間情報ネクス学会、査読有、I' NEXUS No.6、2014、pp.35-44

##### [学会発表](計 7 件)

浅間正道、フィンランド・クオッパヌンミ総合学校視察報告、異文化間情報ネクス学会第4回年次大会、2016.12.17、東京電機大学(東京千住キャンパス)(東京都足立区)

浅間正道、デジタルネイティブたちと如何に向き合うか - 共感的な間柄の今日的築き方、岩手県「平成28年度青少年を非行・被害から守る県民大会、2016.7.21、いわて県民情報交流センター(アイーナ)(岩手県盛岡市)

浅間正道、英語という言語体系 - その冗長性・硬直性・明示性の内側 - 、異文化間情報ネクス学会第3回年次大会、2015.12.19、順天堂大学(東京都文京区)

田村敏広、接続詞「で」「だから」「と」と談話促進機能、意味論研究会、2015.12.18、静岡県立大学(静岡県静岡市)

浅間正道、今なぜ就活力として英語力が問われるのか - その顕在的意義と潜在的意義を俯瞰して - 、異文化間情報ネクス学会第31回定例研究会、2015.9.19、東洋大学(朝霞キャンパス)(埼玉県朝霞市)

浅間正道、科研費採択テーマに探る英語教育研究の特質とチャレンジ領域、異文化間情報ネクス学会第2回年次大会、2014.12.20、早稲田大学(東京都新宿区)

浅間正道、科研費採択英語教育研究テーマに探る実用英語への変遷、日本実用英語学会第39回年次大会、2014.9.20、東北工業大学(宮城県仙台市)

##### [図書](計 4 件)

浅間正道(監修)、実践情報リテラシー、同友館、2017、pp.1-146

浅間正道(編著)、デジタル時代のクオリティライフ - 新たに見つめるアナログライフ - 、遊行社、2016、pp.1-223

浅間正道、Go for the TOEIC Test(eラーニング版)、ニュートン、2016

(<https://www.newton-jp.com/toyo>)

山下巖・西村厚子・デレクイーパル・浅間正道、Global Business Trends、南雲堂、2015、pp.1-68

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

浅間 正道(ASAMA MASAMICHI)

東洋大学・ライフデザイン学部・教授

研究者番号：60262797

##### (2)研究分担者

柏樹 良(KASHIWAGI RYOU)

東洋大学・ライフデザイン学部・准教授

研究者番号：90511329

##### 研究分担者

田村 敏広(TAMURA TOSHIHIRO)

静岡大学・情報学部・准教授

研究者番号：90547001